

平成18年3月27日

橋本 龍太郎 先生

謹啓、時下ますますご清祥の段、お慶び申し上げます。

先生の早すぎる御引退は、どうしたことかと思っておりましたが、今度の中国行きの御成功を心から祈念いたします。

私は、李鵬が、首相になる前の1987年に、中国教育委員会の招きで、文化大革命後、教育を受けられなかった、一説に八千万とも言われた人々を教育衛星放送で、再教育するというプロジェクトで、訪中したことがあります。当時でも日本の大戦中の残虐行為を示す博物館が、上海に設立されているのを、見学し、青少年がみて、成人したら、必ず、反日的になると危惧しました。丁度一昨年サッカーの時の、暴動は、17\*-\*-年後でしたし、昨年の反日暴動を見て、周恩来の国交回復時の中国の大人の内政不干渉の時代と、比べて、いまの中国指導者が、対日強硬姿勢をもって、世界のパワーポリテイクスの中で、日本疎外を目的とし、内政面での失政を外政に転換するというという古典的な国際政治の方策を採っていることを、情けなく思う次第です。

最近の政権与党同士の対話を中国共産党と自民党で推進する中川政調会長の訪中や、谷垣財務相の日中財務対話、さらに昨日（26日）竹中総務相が日、中、韓情報通信相会議で、第4世代携帯電話の標準規格化のための共同研究に対する日、中、韓の協力の合意文書へ署名するなど、前向きな動きもあります。

しかし、先日、中川訪中後、長い間、毛沢東や、国家元首になる前7年間ほど、胡錦濤国家主席が校長を務めた、中国の国家幹部を2ヶ月から1年教育する、北京の謂和園の近くにある中国共産党大学の幹部が、日本で講演し、対日外交政策を述べたのですが、あまりに非妥協的で、私の親しい某外交官なども、相手方が、これでは、日中関係もぼろぼろになったのが回復するのは、困難であると感想をもらしました。まあこの中国共産党の幹部等は、日本をはじめて訪問したので、よく平和の日本の社会の様子を実感してくださいと、司会者がのべたことを、私も、思った次第です。

私のような1市民の感じるところでも、周恩来から、登 小平や、胡耀邦の時代までは、日中関係は、比較的良好であったと思います。私は、天

安門事件の前にも、中国に出張しましたが、事件後、デモクシーの諸外国が、人権の問題で、中国に厳しい態度をとった時にも、日本は、戦前の贖罪意識もあって、中国に宥和的でした。

今では、中国は、このような日本に感謝はしていません。むしろ内外の軋轢を外に転換する目標として、日本を選んでいる感じがいたします。

どうも、80年代ダマスキー島などを巡る中ソ国境紛争の解決した後、中国は、標的を日本にさだめ、日本に対する勝利を愛国心鼓舞の武器とし、日本の戦時中の行為を外交面のカードに使い、日本のなかの意見の相違をいいことに、靖国問題を利用する政策を、外交基本戦略にしていると思われ、江沢民以降、特に激烈になった感じがします。

また、日米を離反させ自分の都合のよい政権を周辺諸国に作っていくという中国の戦略に、韓国もまた、便乗して中国市場を狙っている1面のあることも考えられます。

歴史認識の問題である以上に国際パワーポリテイクスの利害の政策という面があります。平和と繁栄をもたらした戦没者に哀悼の意を表し、現実には、国際政治上の平和の脅威にならず、武力の行使にもならない行為を非難することを、碁の詰め手のごとく使っているのは、残念ですし、靖国の問題が、終わっても、つぎに他の問題を持ち出すことは、当然予想されます。中国が、デモクラシー国家で一党独裁でなければ、こういうパワーポリテイクス的な国の戦略には、必ず、反対の世論も生まれ得るのですが、中国は、伝統的な大中華帝国は目指しても、デモクラシーの国家になるのは、いつのことやらと思えますし、権力政治状上有利な立場にたち、韓国も誘い入れようという魂胆さえ伺われます。勿論、胡錦濤は、国際社会にたいしては、平和的国際協力態勢が、中国の基本であるとは、主張しているのですが、日本にたいしては、見誤っていると思えます。

ただ、国際政治の現実には、決して、心情の倫理ではなく冷厳な権力政治であることは、昭和元禄になれ、憲法改正さえ、踏み出せない日本人が、注意をはらはなければならぬ点と思えます。勿論、日本にとつても、敗戦という厳しい現実をふまえて、他の国と摩擦を生む行為には、十分な注意を払っていかねばなりません。本当は、アジアの独立のために戦った1面は、あったことを、中国や韓国も理解してくれば、アジア共同体の推進も心情的にはスムーズに進むのですが、国際政治の現実には、生やさしいものでないことを痛感します。私は、父から、知、情、意のうちで、

人間最後は、情しかないといわれましたが、1国のリーダーにとっては、ウェーバーのいう「心情の倫理」と「責任の倫理」を統合することが、必要と思えます。

毎年11月に英国のロンドンで、第1次大戦の時の戦没者を弔うために、市民の自主的な祈りから始まったのが、1世紀近くを経て、いまでは、英国女王・政府や、コモンウェルスの諸国の使節を含む追悼の儀式になっていますが、これは、戦敗国の日本では望めない冷厳さと日本は知らねばならないのでしょう。

20世紀の日本の戦争の世紀から、日本が、肝に銘じなければならないもののひとつは、中国の日本に対するマグネットがたえず、二つの方向に日本を分裂させ、そのために、日本が米国を含むデモクラシーの体制の国と離反させられる点にあります。したがって、このような問題で、日本の国内政争が激しくならないよう留意すべきでしょう。

釈迦に説法ですが、中国は、ODAなどで、日本の援助を利用してきましたし、80年代までは、インフラ整備を中心に、大来多 佐武郎氏などエコノミストも中国の経済政策に寄与しました。しかし90年代の「失われた10年」から、金融面でのアドバイスでは、イニシアティヴを失いました。アジア危機のさいの宮沢蔵相の提案、アジア基金は、IMFや、米、中に拒否され、かろうじて、チェンマイイニシアティヴなどからはじめて、実質的には日本が、アジアの回復に貢献したのに、中国から、あまり謝意は、発されていませんし、欧米諸国での私が出たシンポジウムでも、日本の貢献を逆に評価するような雰囲気もありました。また、中国の中央政府の金融政策への助言でも、英米に遅れを取り、中国の中央銀行の人民銀行の外国人のアドバイザーは、英国人4名、米国人1名です。そのうちの英国人の1人は、私が日本のフォーラムの会長をしているロンドン大学LSEの学長（元英国金融庁長官）です。（ついでながら、現イングランド銀行総裁は、このLSEの教授でした）

中国は、日本との貿易や製造業などの緊密な関係の構築のみならず、内部の、都市と農村、社会各層の格差是正や、環境問題などにも、日本の力や技術を必要としています。日本も御承知のように、国連安保理を初めとする外交政策の展開や、アジア諸国への経済政策や、経済協定、共同体推進の場合、中国の理解を得たほうがよい場合もあります。

心情的に諸国民の理解と友好に期待して善意の国と国の関係の構築を企図してきた戦後の日本ですが、中国や韓国の為政者は、自らの政権維持

のためや、自国の利害の実現に、パワーポリテイクスの観点から、他国を糾弾し、しかも正統性を主張する面のあることを、考えざるを得ません。日本にとっては、他のデモクラシーの先進国との良好な関係を基礎に、アジアにおけるデモクラシーの国が発展、増加することを、目標として、アジア外交を展開し、まかり間違っても、戦前の日本のように、米中間の外交に、日本がスクイズされないように留意することは、わが国にとって「歴史の教訓」と愚考します。

要するに中国との友好は、必要不可欠だが、冷厳なパワーポリテクスを踏まえてということになります。

どうか先生のお力で、中国の日本に対する理解が好転することを、祈る次第です。

実は、年賀状を先生の前の住所にさしだしたので、戻ってきたのを、同封させて頂きますので、ご参考にして頂ければ幸いです。また、いつも先生の撮影された貴重な写真をそえた、カレンダーを頂戴していることを、改めて、御礼を申し上げます。

先生の御訪問の成功を祈りつつ。

敬具

宇田 信一郎

なお、2000年の沖縄サミットの時の私へのインタビューの記事を、私がどのように、グローバルな問題を考えているかの、ご参考に同封させていただきます。もとの論文は、英国で（**New Direction in Global Political Governance**）という本に収録されました。